SENDAI CITY DOGS

センダイ・シティ・ドッグズ

［登場人物］

にへいまこと
二瓶真（38）……青葉中央区役所・広報課主任

しょうじまこと
東海林誠（48）……運送会社「東海林運輸」代表

にへいみえこ
二瓶未枝子（38）……二瓶の妻・元百貨店販売員

いわぶちこういち
岩渕浩一（58）……個人投資家

がもうてつお
蒲生鉄雄（35）……せんだいプロレス所属・プロレスラー

あかちりゅうと
赤地流人（49）……南東北厚生局・麻薬取締部捜査官

もりゆうり
守祐吏（52）……南東北厚生局・麻薬取締部課長

てらおか
寺岡みずほ（29）……青葉中央区役所・広報課職員

あべこうすけ
阿部耕助（23）……東海林運輸・トラックドライバー

第一章

Sins of a Man（ある男の罪）

年季の入った庁舎、その一画にある男子トイレの個室にて、二瓶真（にへいまこと）はうんざりした様子で首（こうべ）を垂れた。スマートフォンの通知を見るたびに、彼は何度も同じ心境に陥っている。

家計簿アプリのプレミアムプランに加入したものの、アップグレードされたそれは妙にマメなアプリと化す。同期した銀行口座の残高が減ると、すぐに『残高が低下しています』と知らせてくるのだ。二瓶はそれを目にすると、おせっかい焼きの親の小言を常に受けているような気分にさせられていた。

チャコールグレーのスーツを着用する二瓶は童顔で、飾り気のない髪形も相まって実年齢より若く見られがちだ。ただし、その表情には拭いきれない疲労感が濃く刻まれている。

二瓶が地方公務員――宮城県の県庁所在地、仙台市内の区役所職員として働き始めて

一六年。同期の人間と比べても二瓶の出世は遅かった。現在は青葉中央区役所に勤務している。

比較的花形部署とされる広報課に異動して二年。二瓶は主任という立場を得たものの、その実態は部下がひとりだけのお飾り役職で、雑務に追われる日々だ。

区長や助役といった上層部から思いつきのような広報プランが降ってきて、そのたたき台を作っては壊し、作っては壊し。賽の河原は石を積み上げては鬼に壊されるの繰り返しというが、二瓶の仕事もそんな調子だった。

トイレ休憩での嘆きから四時間後、二瓶は帰宅ラッシュですし詰め状態の市営バスに乗り、自宅の最寄りまで揺られ這う這うの体で家へとたどり着く。

自宅は仙台駅の東口――かつては駅裏と呼ばれていた――から徒歩三〇分、宮城野区にあるマンション〈シティ仙台プレミア〉の八〇一号室だ。九年前に購入した二瓶の城、と言えば聞こえはいいが、実際は中古で買った一室だった。

当時、たまたまその一階上――九〇一号室で〈事故〉があり、空き室だったその部屋の下が相場より安く売り出されていた。その頃住んでいたアパートのポストに投函されていた不動産業者のチラシを見て、現在より勢いの良かった二瓶は内見後即断で契約書にハン

コを押したのだ。

適度に清潔感のある２ＬＤＫ、ＪＲ仙石線沿いという立地。バスも運行し、生活に必要な店舗や施設もあらかたそろっており、なにより八階の窓から眺める景色には開放感がある。住居として申し分ない一方、よく考えもしないで買ったことに後悔がないかといわれると嘘になる。

シティ仙台プレミアから徒歩一〇分圏内に総合運動場があり、同敷地内には県が所有する野球場がある。かつて市民から〈宮城球場〉と呼ばれていた老朽化が進む施設を、二〇〇四年に発足した東北発のプロ野球球団の運営法人が管理を始めた。その後時間と予算を注ぎ込み、テーマパークを兼ねた野球場へと生まれ変わらせたのだ。

以前は寂れた場所だったのが、いまでは球場のレフトスタンド後方に全長三六メートルの観覧車――もともとは地元の遊園地で利用されていたが、閉園を機に球団の母体が購入した――をはじめ、メリーゴーランドや人工芝の公園まで設立されている。

球団は毎年負け続きとはいえ、運営法人は巨大企業へと成長。国民的スポーツが生み出す恩恵もあって、年々仙台駅東口周辺の地価が上昇していた。賃貸物件の需要と比例するように家賃も右肩上がりが続いている。もし二瓶がマンションを手放せば、その売却額は九年前よりも高額になっているという嘘のような状況になっていた。

たしかに住宅ローンは駅周辺のアパートを借りるよりも安い。しかしいざ持ち家を入手したとしても、集合住宅であるマンションは管理費をはじめ、各種保険料、修繕積立金、固定資産税などの費用がかさむ。もちろん契約書にはきちんと記載されているのだが、購入当時二〇代だった二瓶はそこまで頭が回らなかった。

そこに加え二〇一一年の東日本大震災。地震の影響により大規模修繕を前倒しで行ったため、修繕費の積み立てもごくわずかになってしまった。このペースで管理修繕費の値上げを続けても、来期には赤字となってしまう。そこに地震保険の大幅な値上げという追い打ち。シティ仙台プレミア全二六世帯――うち九階の二室は空室だ――はみな家計を圧迫され続けていた。

さらに、管理組合だけでも億劫だというのに、二瓶は理事会員までさせられている。公務員だから有給が取りやすいだろうということらしい。残業を終えても新たな残業が発生するかのような状況に、わずらわしさを感じずにはいられない。

それでも、二瓶はいまの家を手放すわけにはいかない。彼には家のほかにも、守らなければならない存在がいる。

「ただいま」

「……おかえり」

八階は風が強く、その影響でドアが重くなりやすいのも想定外だったことのひとつだ。やっと玄関に着き靴を脱いでいると、リビングへと続く廊下の向かって左手にある寝室より、妻・未枝子（みえこ）のくぐもった声が響いてくる。

二瓶が半開きのドアの奥へ顔を覗かせると、ベッドに横たわった妻が上体を起こし笑顔を向ける。けれどもその顔色は白く、呼吸がか細い。ロングバングの黒髪も力なく背中へと流れている。

「寝てていいよ」

「うん」

夫の一言に未枝子は再びマットレスに全身を預けた。二瓶は一度洗面所に向かい、入念に手洗いとうがいを済ませ、改めて寝室で未枝子の様子を見やる。

二瓶たちは今年で三八歳になる同い年の夫婦だ。未枝子は大学を卒業後、市内の老舗百貨店の販売員として勤務。二瓶とは仙台市が開催するイベントに、それぞれ担当者として打ち合わせに参加したのがきっかけだった。二五歳で結婚し、仕事に打ち込みキャリアを重ねていく最中、未枝子の体に異変が生じた。

未枝子は基礎疾患のない健康体だったのだが、三〇歳になる年に突如喘息が発症した。

気管支喘息と診断されるも、症状は非アレルギー性で原因は不明。薬を服用しても予期せぬ発作が起こりやすくなってしまい、このまま接客業は続けられないと判断しやむを得ず退職した。以降は専業主婦として暮らしながら薬物治療を続け、現在に至る。

未枝子が病院へ行くときは二瓶も可能な限り付き添っていたが、主治医からは「現状では完治は不可能」と告げられていた。それでも、正しい治療法により健康な生活を送ることは可能で、そのためにもできるだけストレスをかけず、ＱＯＬ（クオリティ・オブ・ライフ）の向上が必要だとも。

しかし、いまの自分の生活はＱＯＬとはほど遠いものだと二瓶は自覚している。毎日遅くまで働きづめで、有給休暇はあれど滅多に消費できない。家事だって満足にできていないし、未枝子にも苦労をかけている。

せめて家ではなるべく優しく接してやりたいと思うのだが、これもどうしてうまくいかない。口を開けば仕事の愚痴が出てしまうのを抑え込むので精一杯だった。

「今日も遅かったね」

「ああ……」

「どうしたの？　浮かない顔」未枝子はベッドに横たわったまま弱々しく言う。

「いや、何でもないよ」二瓶は取り繕うように口元を歪めた。

「そう？　無理しないでね」

「うん」
何かいるものはないかと二瓶が確認すると、未枝子は首を横に振ってみせた。時間は早いがもう寝たほうがいいだろうと判断し、二瓶はそっと布団をかけ直す。
「じゃあ、おやすみ」
「おやすみ……ゆっくり休んで。お風呂、すぐ入れるから」
「ああ、ありがとう」
ドアを閉める直前、未枝子の空咳が二瓶の耳の奥に落ちた。

二瓶はリビングに向かい、通勤用のトレンチコートをそのままに革張りのソファに腰掛けた。おもむろにテレビをつけると、バラエティ番組でお笑い芸人が笑っている。チャンネルを変えてみれば、どこかで見たようなドラマがやっていた。
彼はリモコンを手に持ったまましばらく画面を眺めていたが、ふと思い出したかのように立ち上がり、ようやくコートを脱いでリビングと地続きのキッチンへ行く。冷蔵庫に出来合いの常備菜が残っていたのでそれを取り、ご飯をよそいソファの前にあるダイニングテーブルに置く。そして味噌をお椀に直接落としてお湯を入れる。ひとりで食べる夕食の準備は慣れたものだった。

未枝子はよくやっている。だからこそ、自分が決めたこのマンションが負担になっているなんて言えない。

金銭的な問題以外は好条件なのだ。通勤も近過ぎず遠過ぎずのいい距離感で、未枝子のかかりつけ医がマンションと同じ通りにあり、さらに入院先として何度か世話になっている総合病院も近所にある。いまから環境を変えるという選択肢は、よほどのことがない限り選びたくなかった。

結婚して一二年。二瓶は変わらず未枝子をとても愛しているが、未枝子は仕事への未練を抱えながら、仕事に追われている自分を重荷に感じているのではないかと常に怯えている。

二瓶は身の内に巣くう不安を打ち消すため、休日はなるべく家で過ごすようにしていた。趣味も家で完結するようなものがいいと考え、たまに行く旅行で道の駅に寄り、良さそうな鉢植えを買ってくる。未枝子も二瓶の趣味に口を挟まず、夫が多忙なときは進んで水やりをしていた。

栽培に関してそこまで詳しい知識はないし得意なわけでもない。けれど人間関係とは違い、植物には責任を負わなくてもいいし、何より誰とも話す必要もない。慢性的にストレスを抱えている二瓶にとっては有り難かった。

「そうだ、こないだの……」

北海道旅行はなかなか良かった。未枝子の調子も良く、高級でこそないが、それなりのものを食べることもできた。名前は失念してしまったが、道の駅の敷地内にあった無人販売所で、二株ほど鉢植えを買ったはずだった。

二瓶は台所のガスコンロ横にあるガラス戸を開けてベランダに出ると、簡素なプランター置き場に目をやる。そこには北海道土産として買ってきた鉢植えが置かれていた。宵闇に紛れた植物たちからは眠っているかのような雰囲気を感じられる。

「よし、うまく育ってるな……ん？」

どれも枯れ葉や虫食いはないのに、何か違和感がある――二瓶は視線を巡らせたのち、ある植木をじっと見つめる。やけに青々とした緑色で、広げた手のような大きな葉。

そして気づいた。目の前にあるのは、大麻の葉だ。

「うそだろ、おい」

二瓶は動揺から脚をもつれさせたが、何とか転倒を回避しながら大麻の鉢を抱え、物音を最小限に抑えて寝室の向かいにある部屋に逃げた。

「まずいことになった……！」

慌てて壁につけたデスクにあるラップトップを開き、ブラウザーを立ち上げ検索をかけ

る。厚生労働省のホームページがすぐに検索候補に出てくると、『大麻草に注意！』という直球のメッセージが二瓶に叩きつけられた。

「やばい……やばいぞ……」

二瓶は焦った。曲がりなりにも公務員である彼は、こうした不祥事がすぐに去就――もちろん悪い方向で――に繋がることを知っている。さらにインターネットで調べると案の定、大麻の栽培に関するさまざまな注意事項が表示された。

大麻は人の生命、身体または財産に対する危害のおそれがある薬物。

「当たり前じゃないか！　何やってんだおれは！」

二瓶は膝を落とし頭を抱える。そうだ、通報だ。どこかへ通報しなくては。検索サイトをスクロールしていると、下部に検索候補が並んでいる。

大麻　依存性

大麻　タバコと同じ

大麻　儲かる

儲かる。その三文字になぜだか惹かれてしまい、二瓶は思わずそれをクリックしていた。

（何をやっているんだ、おれは）

ふと、定額制（サブスクリプション）の動画配信サービスで観たドキュメンタリーを思い出す。海外――たしかオランダかどこかでは、大麻は合法な薬物であり、当然それに基づいたビジネスが展開されていると。

儲かる。

いつもならそんなことは気にしないのに、慢性的な疲労もあってか二瓶は冷静さを失っており、気がつけば鉢植えの大麻草をじっと見つめていた。

購入から二カ月しかたっていないのに、大麻草はすでに自分の腰の高さにまで達している。未枝子はたびたび入院を繰り返している身だ。こんなものを栽培していることが知られたら、彼女はまた体調を崩すかもしれない。

しかし、儲かる。

ならば、せめていまだけでも、少しでも家計を楽にしてやりたい。そう思い立ち、二瓶はいつの間にかそのままスマートフォンで大麻について調べ始めていた。気休め程度にしかならないが、使用するブラウザーをシークレットモードに切り替える。

検索から数分後、驚くほど簡単に情報が手に入った。気温二五度、湿度四〇度に保ち、昼間は日光に当て、夜は家のなかに仕舞い、赤いライトを効率的に当てる。一二〇日程度

で生育すると、大麻は完成する。何より、乾燥させた大麻一グラムで六千円になる。この鉢植えは二〇〇円そこらで買ったものだ。それが何十倍に――

二瓶は視線を床に落とす。違法性の塊。次の瞬間スマートフォンが震え、通知が降りてくる。

銀行の残高が低下しています――無情な知らせが二瓶の判断能力を奪った。

違法だ。たしかにそうだ。

でも違法じゃない国はいくらでもある。入院費だって限度額があるといっても、奨学金と同じでまずは自力で払わなければならない。マンションのローンや修繕費だって、毎月バカにならない金額だ。

おれは、生きていかなくちゃならないんだ。

第二章

No Escape（逃げ場なし）

未枝子が入院で家を空けたのは、奇しくも翌日のことだった。昨夜の二瓶の動揺に呼応するかのように、未枝子は夜中に発作を起こした。気管支吸入薬を決まった時間の間隔で吸入し、それでも治らず別の処方薬を内服したが、その後も喘鳴（ぜんめい）を繰り返したため救急車を呼び、そのまま入院の運びとなった。

不憫ではあるが、未枝子がいないほうが動きやすいのも事実――妻不在の最中、二瓶はホームセンターで赤色ＬＥＤライトを購入し、自室のクローゼットに配線を引き大麻草を大きめのプランターに植え替えた。湿度計や温度計も設置し、霧吹きで湿度を管理し始める。

マンションの周辺にはバイパスや工業地帯へ通ずる県道があり、学校や病院も集中して

いる。本当はベランダに出して日光に当てたいが、万が一でも誰かに見られるのは避けたかった。とはいえ、クローゼットの中身をぶちまけ、たった一本の大麻草にライトを当てている様は、何とも滑稽で気が抜けてしまう。

「何やってるんだ、おれは……」

何度も繰り返してきた自問で頭を抱えそうになると、逃げるようにクローゼットを閉じて思考をシャットアウトした。もちろん無意味な行為だった。大麻はむしろ閉じた世界でのびのびと生育するからだ。

仕事をして、未枝子の見舞いに行き、大麻の世話を焼く――二瓶の毎日はそうやって過ぎていった。もともと植物の世話は趣味で苦にはならない。物言わぬ生き物の成長を見守ること自体は好ましいとすら感じている。

あっという間に二カ月が過ぎ、三カ月が過ぎた。未枝子の体調はなかなか落ち着かず、自分の夫と家のなかで起きている異変に気づく様子はなかった。

クローゼットを開けるたびに二瓶はくらくらしてしまう。何をやっているんだと頭のなかでぐるぐると悩んで、結局扉を閉めてしまうのだ。大麻草はすでに自分の背丈に届こうとしている。

そんな二瓶の日常に、突如小石が投げ込まれた。

インターフォンが鳴り来客を告げる。誰だろう。通販で何か頼んだだろうか。

買った当時には何だか新鮮に感じたモニター付きのインターフォンも、いまとなっては古臭い。二瓶が通話ボタンを押すと、小さなモニターに男の顔が表示される。相手は八〇二号室に住んでいる東海林誠（しょうじまこと）だった。

東海林は一回り年上だが、疲労困憊で表情が死んでいる二瓶とは対照的に、常に自信ありげな笑みを浮かべた活力のある男だ。二瓶と同じく童顔で実年齢よりも若く見られるのは共通だが、本来は穏やかな雰囲気をまとう二瓶に対し、東海林は常に眼光が鋭い。ゆえに本人が意図せずとも相手に妙な圧を与えがちでもある。

そんな東海林は〈お隣さん〉かつ管理組合の理事長でもあるため、二瓶とは顔を合わせることも多い。けれど家を訪ねて来たことなどいままであっただろうか？　二瓶は首をかしげながら玄関に向かう。

「どうも、二瓶さん。お休みのところすみませんね。ちょっといいですか？」

ドアを開けるとタバコの匂いが二瓶に届く。そこにはいつものように笑う東海林の姿があった。運送会社を経営しており、いまでも現場に出ることが多いと話していたのを二瓶は思い出す。それを物語るように、差し出された回覧板を掴む手には太い血管が浮いてい

た。

「これ、回覧板。しばらくサボっていたでしょう。なかはきちんとご覧になったほうがいい」

「はあ。どうも……」

「奥さん、今年は病院通いが多いそうですね。先日スーパーでご挨拶した際に仰ってました」東海林は敬語を崩さないものの、どこか馴れ馴れしさを感じさせる口調で続ける。「何か困ったことがあれば、いつでも声をかけてください。理事会のよしみですからね。……ところで、ひとつ伺っても?」

二瓶は回覧板に目を落としながら、会計報告――そういえば、マンションの修繕費と積立の納付期限はかなり厳しいんだった――に思いを馳せていた。

「はあ、何でしょう」

「最近、妙なものを育てているみたいですね」

一気に汗が吹き出して、一気に引いていったような感覚に陥る。妙なもの。大麻の二文字が勢い良く脳裏を駆け抜け、二瓶の動きをわずかに止めた。

たしかに、二瓶はささやかな趣味として観葉植物のほかいくつかの花も育てている。それに混じって家庭菜園――ミニトマトやバジルなど、季節に合わせた小規模なもの――もしていた。自宅に籠りがちな妻が「目の保養になる」と喜ぶのもあり、三〇代になってか

らほそぼそと続けていることだ。

ベランダは台所と寝室の二カ所にあり、植物はすべて台所側に置いてある。そこは隣の八〇二号室のベランダと隣接しているため、何かの拍子に見られていたのだろうと当たりをつける。

「ベランダのプランターのことですか？　まあ、その……マンションで花を育てるのは妙かもしれませんね」

東海林はそれを聞くと、どこか機械的とすら見える笑みを見せてから言った。

「いえ。夜になるとクローゼットのなかからゴトゴト音がするものですから。それも毎日、ほぼ同じ時間に。ここはペット禁止でしょう？」

「え、ええ」

「毎日同じ時間にクローゼットのなかで作業をする、ということは何らかの世話をしていると思ったんです。しかし、生き物にしては鳴き声もしないし、妙だな、と。二瓶さんは園芸がお好きだとは伺ってましたから、何か変わったものを育てているんじゃないかと」

にこやかに鋭い推理――それもほぼ満点に近い回答を提示してくる東海林に、二瓶の心臓は余計に脈打つ。

カマをかけたのではない。もう真実に近づいていると言っても過言ではない――いや、

もうわかっていてこんなことを言っているんじゃないのか。
「東海林さん」
「はい」
「あの……黙っていてもらえませんか?」
「私は管理組合の理事長です。それなりの責任というものがある。それに黙っているにしても、きちんと真実を教えていただけないと対応の仕様もないじゃありませんか」
笑顔を崩さず、余裕の態度すら感じさせるように東海林は淡々と述べた。相手とは対照的に二瓶はだんだんと床へ視線を落としていく。どうすればいい。どうすれば――

大麻は売ればカネになる

そのフレーズが電撃的に二瓶の脳裏を奔(はし)り、がばりと顔を上げて玄関から家のなかへ足を戻す。
「なかに入りませんか」
「……いいでしょう」
ふたりは靴を脱ぎ、寒々しい廊下から自室へと入っていく。

いまなら取り返しがつくぞ。そう誰かに言われたような気がしたが、二瓶はもうこれ以上、東海林に誤魔化しが利かないような気がしていた。

クローゼットを開けると、そこには当然大麻草があった。

ああ、やってしまった。そう思う一方で、少し楽になったような気もしていた。ひとりで秘密を抱え続けるのは相応の孤独感に苛む。そこからの開放感が徐々に二瓶の内に滲み出し、わずかに緊張を和らげていく。

「大麻……ですよね？」東海林もさすがに目を丸くしている。

「東海林さん。取引をしましょう。見てのとおり、偶然――そう、偶然なんですが、僕は大麻を育てています。確実に警察に捕まるような犯罪行為です。それはわかってる。そのうえであなたにお願いしたい。この大麻を売ったら、カネになります。黙っていてくれるのなら、利益の半分を渡してもいい」

東海林はまじまじと大麻を観察し――自らクローゼットを閉じた。

「二瓶さん。金に困っている……ということで間違いないですか」

「は、はい」

「何で困ってるんです？」

「は？　何？」

「言いかたを変えましょう。なぜお金で困ってるんです？」

なぜ？　想定していた問答とは明らかに異なる質問に、二瓶は少し混乱した。なぜかと言われれば、答えは簡単だ。

「マンションですよ。住宅ローン、修繕積立金。保険や税金だってキツイし、加えて物価も上がってしまって」

「そのとおり。……実は私もです。この一帯は不景気なんて関係ないって調子で地価は上がり続け、マンションの維持コストは市内で同レベルの物件のなかでも指折りになってしまってる。理事会でも毎度議題に上がっているじゃありませんか」

管理組合の理事は二瓶と東海林を含めた四人。本来であればマンション内の世帯主の三分の二程度の出席が必要なのだが、東海林が会長に就任した際「時間がなければ理事以外は委任状を提出すればいい」と規約を変更したことで、一気にコンパクトになってしまったのだ。ただし二瓶は理事会の役職持ちから逃げられなかった。

「二瓶さん。知ってのとおり、九〇一号室は事故物件で空き家のままです。しかもそれに引っ張られる形で九〇二も空いてしまってるんです。積立金の負担もほかの住人に転嫁されてるような状況だ。他人事じゃないんですよ」

東海林が冷静に告げるが、二瓶はどうも座りが悪かった。これではまるで、大麻栽培に問題がないみたいじゃないか。

「二瓶さん。大麻、ここまで育てるのは大変なんですか？」

「え？　いや、まあその……これといって苦労はありませんよ。ＬＥＤの導入は少し面倒でしたけど、こまめに水をやればいいですし。湿度を一定に保つのだって、そんなに難しくありません。ズボラじゃなければですけど」

「なるほど。わかりました。二瓶さん、明日理事だけで会議を開きます。夜九時でしたら、あなたも参加できますね？」

「え？　あ、はい」

「ではそういうことで。……ひとつ言い忘れました。警察に突き出すようなまねは絶対にしませんから、明日の会議には必ず出席してください。必ずです。じゃあまた」

翌日は本当に仕事にならなかった。未枝子が初めて喘息の発作を起こして入院したとき以来だ。決裁書類が重なってくるたびに、伸ばした手が遠く感じて何も手をつけられずにいる。

「主任、大丈夫ですか？」

広報課の唯一の部下・寺岡（てらおか）みずほが机の横から話しかけてくるまで、二瓶は破滅した自分の今後を想像してぐるぐると脳内でかき混ぜていた。正午を過ぎたというのに、未だ何もできていない。

「え？　ああ、ごめんね。何でもない」

「何でもないのはいいんですけど、一番上の報告の期限、今日までなんですよね。そっち優先でお願いしたいんですけど」

てっきり自分のことについて聞かれるかと思いきや、予想が外れて二瓶は一瞬動きを止めてしまい、遅れてぎこちなく笑みを浮かべた。寺岡は愛想笑いを返すことなく、顎下で切りそろえられたダークブラウンの髪を揺らしながら別の部署へと向かう。

寺岡は大学を二浪で入学し、公務員試験を受け青葉中央区役所に配属された。そのため年齢はほかの新卒よりも二歳上なのだが、社会人の一、二歳差に大差はないというのが二瓶の印象だ。近頃の若者は、他人のことなど――たとえそれが上司であっても――気にも留めないのだろう。

自分だって似たようなものだ。自分本位で、都合だけで、大麻なんてものを育てているんだから。二瓶は自嘲しながら最優先の書類を手に取った。

（……東海林は警察には言わないと口にしていた。いまはそれを信じるしかないけど、だ

とすれば一体、何を話し合うつもりなのだろう）

二瓶は定時になると取るものも取らず、一直線に職場を出て自宅に飛び込んだ。未枝子はいつものように寝室で眠り、自室のクローゼットのなかには変わらず大麻草が鎮座している。

夢ではない。これはすべて現実だ。

ただ、この現実はすぐにでも崩れてしまいそうで、二瓶の体は足先まで不安でいっぱいになっていた。

「お忙しいところ、集まってもらってありがとうございます」

東海林が頭を下げる。ここはマンション一階のエントランスにあるフリースペースで、鍵のかかる会議室が併設されている。大学の講義を受けるかのように、一番奥にはホワイトボードが設置され、それと平行に何個か長机と椅子のセットが並んでいる。管理組合の会議はここで行われていたが、理事だけとなるとたったの四人、随分と広い。

「緊急っていうからさあ、おじさんちょっとびっくりしちゃったよ。んで東海林くん、要件なに？」

一番うしろの席からいきなりそう切り出したのは、刈り込んだ短髪の胡麻塩頭をした初

老の男・岩渕浩一だった。灰色のジャージという冴えない格好にサンダルを履いている。理事会に参加するにはいささかラフ過ぎる格好だが、本人は一切気にしていなかった。

「岩渕さん。今後のシティ仙台プレミアについての重要な案件です。いや、僕らの今後をも左右する、と言ってもいい」

東海林の返答に、前の席に座っていた筋骨隆々の男が手を挙げる。黒髪のツンツン頭、真冬だというのに短パンタンクトップ姿で、筋肉が漲っているかのような体格だった。二瓶よりも年下の男・蒲生鉄雄は宮城県の団体に所属する現役プロレスラーだ。

「……どういうことでしょうか⁉」

何か続くかと思いきや、彼の言葉はそれで終わる。蒲生は毎月の会議でも基本的に無口で、たまに喋っても笑って誤魔化したり、考えがまとまってなさそうなことが多かった。

「実は、二瓶さんの部屋から大麻が発見されました」

終わった。

あまりの単刀直入さに目を開けていられなくなり、現実から逃げるかのように二瓶は目をつぶった。

「大麻？　おいおい、通報はしたのかい」岩渕が驚いたように言うが、東海林は首を振る。

「いいえ。これからもする必要はないと考えています」

「おじさんには話が見えないぜ。どういうことだい？」
「二瓶さんは趣味で植物を育てていらっしゃいます。僕も昨日現場を見に行ったんですが、そんなに大掛かりでもない。岩渕さん、南東北厚生局のご出身でしたね？」
　初めて耳にする情報に、二瓶は思わず岩渕のほうを振り向いた。頬をぽりぽりかきながら、彼はゆっくりと頷いた。
「人事畑だから、マトリだったわけじゃないけど……大麻の恐ろしさは知ってるつもりだよ」
「なるほど。しかし僕は、その恐ろしさは使うからだと考えています。大麻には依存性がある。タバコよりマシなんて話もありますが、違法薬物には違いない。タバコですら我慢できないのに、そんなものに手を出したら身の破滅だ」
「んだな」
　蒲生も同感である様子で何度も首を振っている。
「ところで、このシティ仙台プレミアの会計事情が芳しくないのはご存じですね？」
「ああ。大震災のときは耐えたが、あれの修繕でかなり持っていかれたもんな」
「消費税もあれから五％も上がった。不景気に拍車もかかりましたし、僕の会社だってジリ貧だ。そこで提案なんですが……」

きた。いったい何をさせられるのだろうと二瓶は思わず身構える。最悪の想像だけが脳裏をよぎり続ける。

口止め料？　いったいいくらだ。一億か、二億か……二瓶は吐きそうになり、視界すら歪み始めたような気がした。

「大麻をみんなで育てませんか？　その売上で、修繕費の積立金へ充当するんです」

「はあ⁉」

一番大きな声を上げてしまったのは他でもない二瓶だった。大麻をみんなで育てる？犯罪行為をここにいるみんなでするとでも言うつもりだろうか。

「東海林くんさあ、さすがにそれは笑えないぜ。使わなきゃいいっつっても、大麻は育てるだけでも結構な犯罪だよ？　しかもそれを売り捌くだなんて、おじさんこんな年で売人（プッシャー）なんてやりたかないよ」

「いいえ。売るのは僕です。二瓶さん、メロカリはご存じですか？」

メロカリはフリーマーケット、いわゆる不用品販売サイトのことだ。しかし二瓶にはそれが何だというのかわからなくて、頷くことしかできない。

「僕の会社は、メロカリが委託している宅配便会社の下請けです。メロカリは〈メロカリ匿名便〉というサービスをやっています。その名のとおり、送る側も送られる側も、匿名

のまま売買ができるんです」
「ぼくもよくそれでプロテインを買わせていただいていますね！」
蒲生が笑顔でそう口にすると、東海林は微笑みながら話を続けた。
「まさかメロカリに大麻だって載せられんだろ」
「それはもちろん。注文は別口で、僕が請け負います。注文された大麻は、メロカリ匿名便の箱を使って僕の会社で配送しますし、メロカリへの手数料を載せて販売します。あの会社は結構テキトーでしてね。担当者なんか、メロカリ匿名便を使ってない人が別の目的で箱を使っても、箱の手数料が取れれば御の字なんてことを言ってましたよ」
「ちょ、ちょっと待ってください！　東海林さん、ご自分が何を仰ってるのかわかってますか？」
二瓶は思わず話を遮った。これではまるで、組織犯罪ではないか。あのとき観たドキュメンタリーで出てきたみたいな――
「驚いたね……要は個人間の売買でもなく、ヤクザも絡ませないってことかい。これじゃ麻薬カルテルだね」
蒲生も、岩渕もそれきり押し黙った。妙だと思った。こんな場面で沈黙することはない。犯罪の片棒を担がせるなとでも怒って出ていくのが筋だ。

それは自分も同じはずだ。たしかに犯罪に足を突っ込んでいるが、東海林の言うような大規模なものなんかじゃない。まだ戻れるはずなのに。

「みなさんの仰りたいことはわかります。でも、みなさんもあとがないんじゃありませんか？　お恥ずかしながら、僕の会社は火の車だ。人手が足りないのに報酬は下げられてる。蒲生さん、あなたは怪我の治りが良くなくて試合に出られず、うちの会社でアルバイトを始めたくらいだ。岩渕さんも、このあいだの株価暴落で相当やられたんじゃありませんか？　たしかいまは投資で年金まで食いつないでいらっしゃると」

二瓶自身も言うまでもなく、住宅ローンと未枝子にかかる医療費で首が回らない状況まであと一歩まで来ている。

おれたちはこのマンションと同じだ。ボロボロで、あとに引けなくて、お金をつぎ込むだけつぎ込んで何とか保たせている。

「……分け前はどうするんだい。俺もそれを聞かないうちは返事はできないね」蒲生もそれに頷いた。

「きっちり五等分です。五分の一は雑収入として、シティ仙台プレミアの会計に組み込む。残りの四分の一ずつが我々の取り分だ。いずれ規模を増やして、マンション全体でこのビジネスを拡大する。そうすれば、このマンション全体がリッチに生まれ変わるはずです」

「むちゃくちゃだ……」
「二瓶さん。むちゃくちゃでもやるしかないんですよ」
東海林はつかつかと二瓶の前まで歩いて来ると、手を二瓶の肩に置いてその目を彼と合わせた。本気の目だ。
「あなたはすでに犯罪に手を染めてしまった。本来ならあなたを警察に突き出さないと我々も破滅です。リスクをすでに取ってるんですよ、我々はね。なら、あなたがすべきことは、手を取り合って前に進むことだけだ。我々は、もう一蓮托生なんですよ」
二瓶はもう何も言えなくなり、力なく頷くしかなかった。
他にどんな選択肢がある？　未枝子もおれも、カネが必要なんだ。それしか方法がない。浅ましく、野良犬のように、目の前に差し出された毒の餌でも貪るしかないんだ。
「犬だ、こんなの……野良犬と同じですよ」
「犬。私は犬、好きですよ」
「……こうなりゃやけだよ。俺たちゃ大麻カルテルだ。日本初だろうよ、マンションのなかでそんなことすんのは。いっそ名前でもつけるか」
「なら、リングネームのようにかっこいいものがいいですねえ！」
思わぬ方向に転がっていく会話に、二瓶はひとり閉じこもるように頭を抱えていた。

ああ、こんなはずじゃなかったのに。

おれはこんなことをするつもりじゃなかったのに！

「では、せっかくです。この街で活動することを踏まえ、シンプルにいきましょう。今日から我々は――シティ・ドッグズだ」

第三章

Death of Conscience（良心の死）

シティ・ドッグズの活動内容はトントン拍子に決まっていった。大麻は湿度管理と光の管理をしっかり行えば簡単に増えていく。二瓶の株からは白い花が咲いて、そこから種が取れた。

さらにそこから三カ月――東海林はメンバーの部屋に大麻栽培用の機材を運び込み、趣味で園芸を始めるかのような気軽さで大麻を育て始める。面白いように大麻は育ち、それを東海林の部屋で買い物袋に入れて集め、今度は乾燥させた。二瓶の記憶では東海林は妻帯者で娘もいるはずなのだが、二瓶が部屋に行くときはいつも姿を見かけなかった。

かつては娘がピアノの練習を始めると壁越しに演奏を耳にしていたものだが、もう習い事はやめてしまったのだろうか。子供部屋らしき場所のドアが開いていた際こっそり覗い

てみたが、ピアノは確認できなかった。

彼らはヒートガンと呼ばれる、主にＰＣパーツのハンダをとるための強力なドライヤーのようなものを使い、管理組合の会議と称して全員で大麻を乾かす。乾燥大麻――岩渕によれば、末端取引価格はグラム単位一万円を超すらしい。

（こんなものが……）

一〇〇円ショップで買ったファスナー付きの小分け袋へ大麻を手分けして詰めていく。もとは一株三〇〇円のプランターが、二〇〇万円の大麻に化けたのだ。

「片手間にやるにゃあたしかに簡単だけどさ、東海林くん。本当に手、後ろに回らないだろうねえ？」

小分け袋に詰まった大麻が並ぶ様は壮観だった。二瓶はその様がなおさら恐ろしく感じて、それから目を背けた。

「そこは安心してください。メロカリ匿名便のシステムは、営業所への持ち込みも対応してるんですよ」

「それは聞いたよ。でもお金はどうすんだい」

「バーコード決済のＰＥＲＩ　ＰＥＲＩを利用します。海外資本のサービスなら、たぶん

足がつきにくいと思いますよ」

淡々と準備を進めていく東海林にも、それに特段の反論や意見もない岩渕や蒲生にも、何よりそんな気力もない自分にも、二瓶は何とも言えない気持ちを抱えていた。

こんなことは間違っていると頭の片隅で何度も考える。でもそこから先を考えたり行動する気力がない。

東海林は「面倒をかけさせないため」と言って、大麻の顧客については一切のことを二瓶たちに伏せた。

たしかに、秘密を共有するのは少ないほうがいい。二瓶はそんなことを考えながら、もしかしたらこんなことはすべて夢だったんじゃないか、嘘なんじゃないかと思いながら日々を過ごしていた。

一カ月後、残業をしていた二瓶のスマートフォンに家計簿アプリからの通知が届いた。

『高額の入金があります』

給料日までまだ日数があり、公務員である二瓶にそんな入金のあてがあるはずもない。アプリを覗いてみると、何と四〇万円が入っていた。職場にいた彼は思わず叫びそうになるのをこらえ、スマホを引っ掴んでトイレに駆け込んだ。

たしかに四〇万円入っている。詐欺でも何でもない。送金先は〈シティ・ドッグズ〉。東海林の仕業だ。

その直後にメッセージアプリの通知が立ち上がり、東海林のアイコンが顔を覗かせる。

マンション管理組合・理事会開催のお知らせ。

お忙しいところ恐縮ですが、ぜひお集まりください。

そんなものを見てからはもう仕事にならなかった。「嘘だ」と否定したい気持ちと「やった」という喜びがないまぜになって、タスクを消化するのが精一杯だった。

とにかく一刻も早く家に帰りたかった。逸る気持ちを抑えられず、帰宅ラッシュの最中滅多に利用しないタクシーを捕まえるくらいだった。

マンションに着いてからも、ただエレベーターを待つのがもどかしく階段に足を向けたそのとき、エレベーターの扉が開く。すぐに乗り込んで八階のボタンを押すと、今日の仕事を終えたらしい東海林が滑り込んで来た。

「ご覧になりましたか?」彼はそれだけ言った。

二瓶は頷くことしかできない。何も言えなかったのだ。

「会議は九時からですので、いつもの場所で」
彼はいつものように人好きのする、それでいてまっすぐに見つめた瞳がどこか不気味な笑みを見せて、一足早く部屋に入って行った。

シティ・ドッグズの活動はさほど難しくはない。在宅の岩渕や、時間の融通が利く蒲生が大麻の栽培を管理し、二瓶がそれらをフォローする。月に一度全員で集まって〈収穫〉した大麻の葉を全員で乾燥させる。会議室で大麻の臭いがするのは危険だろうということで、乾燥作業は東海林の部屋で行われた。
何せ大麻というのは金（ゴールド）より儲かる。ただし東海林が製品化した乾燥大麻をどのように捌いているのか。他のメンバーは誰も聞かなかったし、知りたいとも思わなかった。
「二瓶ちゃん。クギ刺しとくけどさあ、商品には手ェ出さないほうがいいよ」
乾燥作業中に、岩渕がふとそんなことを漏らした。東海林はその一言に興味を示し、続きを促す。
「大麻ってのはいわゆるゲートウェイドラッグっつってね。たしかにタバコよりは依存度はマシだ。でもジャンキーにとっちゃ物足りない。そのうちどんな上物の大麻でも足りなくなる。するとどうなると思う？」

「さ、さあ……」二瓶の返事に対し、岩渕が器用に片眉を上げてみせる。
「もっと強いのがほしくなるのさ。人間は欲をかく。まあ俺だって似たようなもんだけどね？　投資なんてのは欲をかいてナンボだからさあ……だがドラッグはそういうわけにもいかない。俺たちは毒まんじゅうを食ったが、何も皿まで食うこたあない」
蒲生は神妙な面持ちでそれに頷きながら、再び大麻の乾燥作業へと戻る。
「大変興味深い話です。シティ・ドッグズのルールにしましょうか。こういうのは大抵、売る側が勝手に商品を使うからボロが出るものですからね」
みな、その言葉に無言になった。東海林自身はどうだか知らないが、二瓶は他のふたりとそう考えは変わらないのではないか、と思っている。
一瞬よぎった考え――では、使う者たちの末路はどうなるのか。それは誰も口にはしなかった。

二瓶家の家計は黒字になったが、未枝子の体調はどうにも安定しない。ここ数年で一番不安定といっても過言ではない。良くなったかと思えば悪くなる、の繰り返しだった。
仙台の梅雨は長く、例年梅雨明けが発表されるのが七月の末頃になる。しかしやっと梅雨が明けたとしても、翌月に開催される七夕祭りでは、期間中に一日は雨が降るというジ

ンクスがある。温暖化の影響か、二瓶の少年時代に比べると東北地方も年々暑さが増しているが、夏らしい快晴に恵まれる日は実のところあまり多くはないという印象があった。

そんな梅雨の一幕。鈍色の雲が広がる窓の外を眺めていた入院患者が室内へ目を向ける。

「別に、病院が好きなわけじゃないんだけどねぇ」

シティ仙台プレミアより徒歩二〇分。仙石線宮城野原駅の眼前にある宮城野総合医療センターの一室にて。未枝子は白い肌にくたびれたような表情を乗せつつ、何でもないといった体を装っていた。そんな彼女を見ると、二瓶は己の罪深さを再認識して泣きたくなる。

ここでも二瓶は賽の河原の話を思い浮かべる。三途の川のほとりの賽の河原。石を積み上げ、積み上げて、親より早く死んだ子供たちが己の罪を許されようと塔を作るのだ。

未枝子は二瓶にとっての賽の河原の石なのかもしれない――長い睫毛で縁取られた未枝子の透き通った目から逃れたいものの、病室に閉じ込められがちな妻が可哀想で、結局面会時間ギリギリまで病室に留まろうとしていた。

「ね、そういえばさ。最近変な患者さんが多いみたいなの」

あと一〇分くらいで面会時間も終わりという頃に、ふと未枝子がそんなことを切り出した。

「変？　変って、何が？」

「薬物中毒っていうのかな？　泡を吹いてる人が運び込まれて来るとかって……ちょっと怖くて」

二瓶は自分の心臓から血の気が一気に引いた気がした。それは自分たち（シティードッグズ）のせいかもしれない。いや、時期的にもそうとしか考えられない。

その一方で、二瓶の心の内は不機嫌に叫ぶ。

おれは関係ない。ほしいやつが勝手に買って勝手に使って、勝手に倒れているだけだ！

「……未枝子、そろそろ行くよ」

「うん……真、大丈夫？」

二瓶は努めて柔らかく微笑みながら首肯する。それを受けた未枝子は何か言いたげな様子だったが、立ち上がった二瓶に小さく笑みを浮かべ、手を振った。病室をあとにした二瓶から表情が消える。

そうだとも。おれは未枝子のためにカネが必要なだけだ。それで薬物に手を出すようなクズが何人身を持ち崩そうが、どうだっていいじゃないか――

職業柄腕時計は欠かせないが、メッセージや家計簿アプリの確認ついでに時間を見る癖がついた二瓶は、左手首よりも携帯端末を優先してしまう。時刻を確認したと同時に新た

な通知を見やり、アプリを立ち上げた。
シティ・ドッグズ関連の内容を確認し、これは通話のほうがいいとアプリを切り替える。しかしその先が億劫で電話番号に触れられず、少しだけ引き伸ばしてしまう。
さっさと帰ろう――早足で二瓶が階段を降り一階のロビーに出ると、突然目の前に影が広がったかと思った瞬間、何かにぶつかる。二瓶はその場で尻餅をつき、次いで手放してしまったカバンの底鋲とスマートフォンが床に接触し音が周囲に響き渡る。
鈍い痛みで目を細める二瓶の眼前に立ちはだかったのは、高身長で恰幅の良い男だった。七月だというのに長袖で襟付きの紺色のシャツを着用し、黒いジャケットが腕にかけられている。刈りそろえた短髪に加え、口周りを覆うヒゲは厳つい。
何より恐ろしいのはその目だった。瞳孔が開き、吸い込まれそうなほど黒目がちな瞳。二瓶はまるで自分が見透かされているような気分になった。
スポーツ選手、武道の有段者、あるいは警官か自衛隊員かと見紛う外見と気迫を持つ男が無言で手を差し出し、二瓶がそれを掴む。次いで落としたままだったスマートフォンを渡され、すみませんと小さく謝る。対して男はニコリともせず、その場をどこうともしない。
「あのう……何か？」
「失礼。私はこういう者で」

男が慣れた様子でジャケットの裏ポケットから出したのは、手帳大の身分証だった。そこには、南東北厚生局麻薬取締部捜査官・赤地流人（あかちりゅうと）と記載されている。

「南東北厚生局の赤地と申します」

二瓶は込み上げる嘔吐感からしばし呼吸を忘れた。

仙台駅西口から徒歩で約二〇分。仙台市の都心部である青葉区本町――国道四八号と県道二二号の切り替え地点かつ、けやき並木が続く定禅寺通りとの十字路の周辺には、県庁舎や市役所、二瓶の職場である青葉中央区役所といった公的機関の庁舎が集中している。

さらに交差点の一画には勾当台公園という大規模な都市公園、その隣の街区（ブロック）には官公庁――仙台第三合同庁舎があり、その施設内に南東北厚生局がある。シティ・ドッグズの活動開始以降、二瓶が最も目を背けていたい政府機関のひとつだった。

麻薬取締部捜査官がどのような目的で動いているのかなど聞かなくてもわかる。そして、自分になぜ話しかけてきたのかも。

「な、何でしょうか……？　麻薬取締の方が……」

「こちらの病院、最近薬物中毒による搬送者数が増えてまして。仙台市内でも異常な数字になっているんです」

「は、はあ」

二瓶は内心、相手は何もかもわかったうえで話しかけてきているのではないかと思ってしまう。そんな二瓶の心配をよそに、赤地は話を続けた。

「今日は見舞いか何かで？」

「妻が入院しておりまして……あの、もういいですか？」

「これは失礼。こう見えて仕事人間でしてね……初対面の方にはひととおりのことを聞いてしまうんです」赤地はそう言って頭を下げる。

「失礼いたしました。いまさらですが、腰は大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫です。では、これで……」

二瓶は早くこの場を離れたくて仕方がなかった。赤地の返事も待たずにカバンを拾い上げ、足早にその場をあとにする。

何か汚いものに触れたような心地だ。そしてその〈汚れ〉は、自分に違いない。赤地は偶然ぶつかった男に話しかけただけで、二瓶の正体やその所業に気づいたわけではないのだろう。そう思えばこそ、二瓶は自らが汚れてしまったように感じた。

宮城野総合医療センターを出た二瓶はそのまま自宅には向かわず、病院と自宅のちょうど中間にある総合運動場を経由し、野球場の裏手に出た。

バックネット側には貨物鉄道の仙台貨物ターミナル駅がある。昭和三六年に開業した貨物駅で、二瓶は物流拠点を上から一望できる歩道橋・宮城野跨線人道橋を歩いていた。

宮城野地区から宮代地区へと続くこの歩道橋は、ターミナル駅を利用しない一般市民でも通勤・通学で行き交う者が多い。しかし帰宅のピークにも関わらず、この日は二瓶以外の姿を見かけなかった。彼の眼下ではワインレッドのコンテナが所狭しと並んでいる。

曇天の空模様でも太陽が沈みかかっているのがわかる。そして地平線の彼方では微かに光が奔っている。ところどころ錆びついた水色の手すりにもたれかかり、二瓶は太陽が沈む瞬間——夜の訪れを見守った。

無心になれる時間を求めてこの場にやって来たものの、二瓶の脳内にはさまざまな考えが去来する。なかなか安定しない未枝子の容体、中毒症状で搬送される患者の増加に、南東北厚生局の動き。これらはシティ・ドッグズにも共有しないといけない。

懐が潤って解消されるどころか次々と増えている懸念事項が、二瓶の心に新たな焦燥感を生み出す。しかし着実に肥大化していくそれを、いまの二瓶では消し去ることはできない。

日が沈み、周囲を照らすのが陽光から街灯に切り替わった頃、今度こそ二瓶は帰路に就いた。

本職以外の安定した収入を得られるようになったことで、メンバーの生活はそれぞれ好転し始めている。怪我が原因で欠場続きだった蒲生は、治療費を得たことでより腕の良い医者にかかった結果、回復が早まり試合出場のめどが立ち始めた。覆面レスラー（マスクマン）である蒲生――ちなみに彼は悪役（ヒール）ではなく善玉（ベビーフェイス）だ――はこの期にマスクの新調を検討している。

岩渕は投資の資金が増額したことにより、より多くの利益を回収できるようになった。さらに古くなった車や家具を買い換えるなど、これまで疎かにしていた生活必需品のアップデートを続けているのだと二瓶に語ってみせた。

普通に接する分にはみな善良な一般市民なのだが、大金を得て嬉しそうにしている男たちを見ていると、その金の出どころは――などと、余計なことを言ってしまいそうになるときがあった。野暮なことは言わなくていい。そう自分に言い聞かせ、二瓶はひたすら聞き役に徹した。

東海林も二瓶と同じく近況の変化は積極的に語らず――口にするのは自分の会社の経営についてが大半だった――にいたものの、二瓶は偶然、東海林の内情に一歩踏み込む場面に遭遇した。

あくる日、いつもより早めに残業を切り上げ一八時前に帰りついた二瓶は、八階に着い

てエレベーターを降り、八〇一号室の玄関ポーチを開ける。すると入れ違いで隣の八〇二号室の玄関ポーチから少女がひとり出て来た。

「本当に車出さなくていいのか」

「大丈夫だって。すぐそこで友達と待ち合わせてるから……あっ、こんばんは」

「ああ、二瓶さん。今日は早いですね」

「こ、こんばんは」

ぶつかった視線の高さから、二瓶の記憶にいた少女――東海林の娘の情報が数年振りに更新された。最後に見たときはまだランドセルを背負っていたのが、いつのまにか背が伸びてブレザータイプの制服姿になり、しかし年齢のわりに大人びた風貌をしている。目元は東海林誠の血を強く引いていることを物語っていた。

じゃあねと手を振りエレベーターに乗り込む娘を、東海林はドアが閉まったあともしばらく見つめていた。そうして表示灯の回数表示が1で止まったのを見届けると、何となくその場に佇んでいた二瓶に向き直った。相手の雰囲気がいつもより軟化していたからか、二瓶はそのまま会話を続けてしまった。

「娘さん、随分大きくなられましたね」

「ええ、今年で一五になりました。受験を控えてまして、これから友達と塾に行くそうです」

「そうでしたか。じゃあ親御さんは踏ん張りどきですね」
「はい。あと、機会がなかったのでお伝えしてませんでしたが、うちは三年前に離婚してしまいましてね。娘は元妻と暮らしていて、こうしてたまに小遣いをせびりにくるわけです」
二瓶に視線を合わせつつ、東海林の意識はエレベーターのほうへ向けられたままだ。娘との別れが名残惜しいのだろうか。二瓶は人の親の顔をしている東海林に対する同情と、ここ数カ月抱えていた謎がほどかれていくのを感じる。
ピアノの音がしなくなったのは、東海林の元妻――何度も挨拶し、未枝子ともそれなりに会話をしていたと記憶している――が娘を連れて家を出たからだ。そうして自宅から発せられる生活音が減った結果、二瓶の生活音が耳につき、クローゼットで独自に大麻を育てていたときの物音に気づいたのだろう。なぜバレてしまったのかという疑問が二瓶のなかで燻っていたのだが、ようやく解決に至った。
さらに、離婚となると円満にしろそうでないにしろ、男性側に慰謝料の支払い義務が発生するケースが多い。親権を妻が持っているということはその可能性が濃厚だろう。
『言いかたを変えましょう。なぜお金で困ってるんです？』
『そのとおり。……実は私もです』

『みなさんもあとがないんじゃありませんか？』

『僕の会社だってジリ貧だ。そこで提案なんですが……』

これまでの東海林の発言が二瓶の脳裏によみがえる。最初に大麻を入手してしまったのは二瓶だが、その後の流れ、特にシティ・ドッグズの結成に意欲を見せ理事会のメンバーをまとめたのは他でもない東海林だった。

共通事項であるマンションのローンに修繕費の積立金、会社経営に慰謝料、養育費。加えて娘の受験費用――たったいま得た情報を踏まえ改めて整理してみると、メンバー内でも特に切実な理由が彼の肩にのしかかっているのがうかがえる。自分たちの行動は法律や倫理観に反しているとはいえ、二瓶はいまの東海林を責められないと感じる。

「大変ですね」感慨深く二瓶が口にしたのに対し、東海林は否定せず頷いた。

「まぁ、妻との縁は切れてしまいましたが、親子の縁が辛うじて残っているのは不幸中の幸いってやつですね。それが小遣いほしさだったとしても、娘に嫌われるよりはマシです」

「……私には、それだけには見えませんでしたよ」

これは個人的な願望かもしれない。ただ少なくとも、二瓶には娘の姿はそう映った。本心から伝えた言葉が相手に届いたのかは不明だが、東海林は無言で会釈してみせたのち、自分の部屋に戻った。

「ただいま」
「おかえり。音がしてからなかなか来なかったけど、誰かと話してた？」
「うん、東海林さんと」
「そう」
帰宅に合わせ玄関までやって来た未枝子を見た二瓶は安堵した。寝室のベッドやリビングのソファーに頼らず身を起こしていられる妻の体調にも、自分はまだ何も失っていないということにも。
未枝子が入院する際、期間は長くとも一週間程度だ。それでも未枝子が家を空けていると、二瓶の胸中で常に隙間風が吹いているかのような心地にさせられる。ここのところは未枝子の容体は落ち着いており、医師と相談を重ね見直し続けた投薬計画がやっと適合したようだった。一時期に比べ顔色も良くなり、日常生活も不便なく過ごしている。
シティ・ドッグズでの活動によって得た収益により家計は黒字に戻り、家計簿アプリは以前に比べて無口になった。二瓶は月々の支払い関係や医療費以外に金を使うことなく、自宅と職場の往復を繰り返す日々を送っている。
北海道土産に大麻が混ざっていたと発覚したのは二〇一八年。いつのまにか年が明け、

二瓶が麻薬カルテルとして暗躍するようになってからもうすぐ一年になろうとしていた。

私生活周りは目まぐるしい変化に見舞われているものの、職場に関してはその限りではなかった。令和になりペーパーレス化が推奨される時代になっても、相変わらず二瓶はあらゆる書類と向き合い雑務をこなす日々だ。

唯一の後輩である寺岡は相変わらず淡白で、彼女の人となりを知れるのは仕事のみだ。リスクを恐れるきらいはあるが、納期厳守でルーティンをこなしていけるタイプ。二瓶のなかでの寺岡みずほという女性の印象に揺らぎは見られない。

ただ一方で、心なしか以前よりも雰囲気が軟化していると感じる場面が何度かある。何がセクハラやパワハラになってしまうのかの判定が難しく、雑談で話題を提供することはないのだが。憶測に過ぎない、そうであってほしいという個人の願望かもしれないが、こうして二瓶の日常は静かに回っている。

これ以上の変化を二瓶は望んでいない。預金額に余裕があることを確認するだけで満足だ。シティ・ドッグズの活動は継続しているものの、あまり派手に動きたくないのが本音だった。それは現状彼だけが接触している男・赤地の存在が大きい。

たった一回遭遇しただけで、これ以上は危険だと本能が警鐘を鳴らし続けている。この

件はシティ・ドッグズの面々にも共有済みだが、現状乾燥大麻の出荷を止める気配は見られない。良くも悪くも、彼らの日常の根幹は変わらずにいた。